

現代社会に生きる私たちと西欧の歴史

—European history for today: What can we learn from the past?—

社会科教育 森 貴子

1. 授業の基本情報・概要

2019年度前期・金曜日3限開講の外国史1は、一回生以上を対象に、上記タイトルで開講された。一般的包括的な内容を含む、中学社会・高校地歴の教員免許状取得に必要な科目であり（選択必修）、中等教育で扱われる西洋史領域の基礎を学ぶものである。西洋史の分野（外国史1・2・3）では例年最も多くの、かつ多様なコース・専修の学生が履修する。また本年度は社会人聴講生の参加もあった。

(1) 講義の目的

本講義の目的は、現代社会の特質を、資本主義の生まれた西欧を場として歴史的・長期的観点から捉え直させ、今という時代がどんな時代であるのかという「歴史感覚」を身につけさせることである。また、中学校社会科や高校地歴の教員を目指す学生が多く受講するため、中世から近現代について最低限必要となる西洋史の知識を獲得させたいという思いがある。

より具体的には、①中世から現代までの西洋史における歴史的流れを大まかにイメージできる、②封建制、コミュン運動、資本主義などの基本的用語について、正確に説明することができる、③現代社会をめぐる諸問題が、歴史的に形成されたものであるという認識を持ち、論述することができる、主として以上の目標を掲げている。

(2) 講義の詳細

授業は講義形式で行われた。『あなたが歴史と出会うとき』（堺 憲一著、名古屋大学出版会、1989年）をテキストとしつつも、そこに最新の研究動向を加えながら中世から近代（世界大戦前）までを概観し、前近代と比較した場合の近代社会の特質を整理した。主たる内容は、中世の農村（荘園制と領主＝農民関係／三圃制と農村共同体）、中世の都市（都市の形成と自治／経済活動とギルド）、

「封建制の危機」と中世社会の変容、「地理上の発見」と国際的商業活動の変化、資本主義成立の精神的背景（宗教改革）、イギリス産業革命とその功罪、である。

学生に対しては、テキストについて、各回の授業で扱う範囲を事前に読み込み、自分なりの理解をしておくことを要求した。また、各回の内容に沿った史資料を可能な限り準備して、学生による理解を手助けすると同時に、ビデオなどの映像資料も利用して、各々の時代をイメージしやすいよう工夫した。取り扱う内容については、各々のテーマをめぐる研究動向に触れながら、歴史解釈は不変ではないこと、テキストはある特定の視点からの叙述であることを強調している。

2. 授業評価の内容と結果

授業評価は、学生に無記名アンケートを実施し、その結果にコメントを付すことで行うこととした（2019年7月26日の学期末試験終了後に実施）。アンケート回答者は30名（小学校サブコース一回生13名／三回生3名／四回生2名／学年不明3名、中等教育コース社会科教育一回生5名、保健体育一回生1名、美術教育三回生1名、総合人間形成課程人間社会デザインコース四回生1名、所属・学年不明1名）であった。

◎問1～6は、次の五段階で評価してもらい、下表のような結果を得た。

<評価基準>

- 5：強くそう思う（非常に良い）
- 4：ややそう思う（良い）
- 3：どちらとも言えない（普通）
- 2：あまりそう思わない（あまり良くない）
- 1：全くそう思わない（良くない）

<問い>

問1 この授業への出席状況は

- 問2 授業のテーマ・目的は、明確でしたか
 問3 教員の説明は分かりやすかったですか
 問4 配付資料・映像資料などは有用でしたか
 問5 授業の内容・レベルは、あなたにとって適切でしたか
 問6 授業によって考え方が培われたり、得るところがありましたか

評価	5	4	3	2	1
問1	13	10	4	3	0
問2	17	10	3	0	0
問3	15	10	3	2	0
問4	16	9	3	2	0
問5	8	11	9	2	0
問6	11	14	5	0	0

*問に対するコメント

- 問1：低気圧による頭痛／教育実習で休んだ
 問2：本題に入る前にねらいが示されていた
 問3：高校の頃に学べなかった資本主義への移行が学べてよかった
 問6：初めて知ることが多かった

◎問7、問8、問9は記述式で解答を求めた。
 以下では内容を整理して取り上げる。

問7 この授業で良かったと思う点、印象に残った点を挙げてください。

映像を用いていた点（8名）／配布資料のおかげでイメージしやすい（8名）／経済という切り口（3名）／世界史の面白さがわかった、興味が湧いた（3名）／ほぼ毎回参考資料や文献が紹介される点（2名）／目的にあった（ポイントを押さえた）授業で理解しやすい（2名）／高校のような授業形態／授業の流れがよい／前回のまとめを次回の最初に行うので、つながりを持って学べた／受験生並みに勉強できる機会を与えてくれた／高校の時より一つの分野を深く学べた

問8 この授業で改善すべき点を自由に挙げてください。

板書が速い・多い（5名）／説明が分かりにくいところがあった、もう少し説明が欲しい部分があった（2名）／世界史をやっていない人には少し分からないところがあった／教

科書をあまり使っていなかった／時代のつながりを考える／質問をしてもらって、双方向の授業をしたかった／試験でノートの持ち込みを認めて欲しい／成績はレポートで評価して欲しい

問9 この授業を受講して、日本の近代化の特質や、我々の生きる現代社会の諸問題について、考えることができましたか。

世界について知ること、日本についても考えることができた／資本主義について考えさせられた／現代の日本や世界を作っているのは歴史的事実であり、今回の資本主義は現代にも残っていると感じた／世界への幅広い考え方を身につけることが必要だと思った／日本の近代化についてもっと深く学び、その発展の違いを比べてみたいと思った／中世の人々の思想や社会の状況から、現代に共通することがあるか探してみたい／子ども観の変化がどのように生じたのか、資本主義との関連で調べてみたいと思った／南北問題について／資本主義が行き詰まった先、我々がなすべき行動について／時代によって、解決すべき問題や方法が違っていることが多く、視点を変えないと理解しにくいこともあったと思った／授業のコマ数がもう少し多ければ、現代の日本の特質や社会の諸問題について考察することにつながったかもしれない／多少考えた／あまり考えなかった（2名）

3. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

前述のように、本講義は、主として西欧を対象に、中世から近代までの歴史的流れを大きく把握し、そこから前近代と近代社会の違い、そして我々の生きる現代資本主義社会の特質を理解させることに重点を置いている。こうした時間的・地理的枠組みを採用していることから、比較的狭い範囲の地域社会（愛媛県や松山市などの）を念頭において「教育と研究のつながり」を論ずるのはそもそも難しい。中・高の歴史教科書分析を教育実習に活かすことも、「地域社会を核とした教育と研究のつながり」の具体的なあり方の一つであろうが、前期の一回生にとって実習はまだ先の話であるし、正直に言って講義中に教科書の内容を掘り下げる時間的余裕はない（受講生の意識を高めるため、該当する教科書の記

述を取り上げることはあるが)。したがって本講義を対象に「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について考察するといっても、アンケートの問9で、我々が住む「日本」という地域や、自らが属す現代社会への問題意識が高まったかどうかを尋ねるのがせいぜいと思われた。もともと、現代日本に生きる我々にとって西欧の歴史がどのような意味を持つのかという点は、本講義を貫くテーマに関わっており、一回目の講義で時間をかけて説明するとともに、「日本ではどうだったか」、「現在の我々の生活との相違点は何か」などといった問いを、14回の講義全体を通じて繰り返し、関心を喚起したつもりである。

問9の回答からは、様々なレベルで、少なくとも日本や現代社会に対する比較史的な関心が呼び起こされているさまが読み取れよう。抽象的な回答にとどまらず、具体的なテーマ（例えば、日本の近代化とその発展の仕方における西欧との違い、子ども観の変化、中世に生きた人々と現代人との共通点、南北問題についてなど）を挙げてくれた受講生も散見され、この点では本講義の成果を感じることができる。

ただし、中世から近代までが対象ということで、ともかく時間内に扱うべき内容が多く、受講生にはあれこれ思考する余裕がなかったことも推察される。「授業のコマ数がもう少し多ければ、現代の日本の特質や社会の諸問題について考察することにつながったかもしれない」とのコメントから、あるいは問8では「質問をしてもらって、双方向の授業をしたかった」ことが授業の改善点として指摘されていることから、歴史的な知識や理解を保証しつつも、受講生の思考を深めていくような取り組みを、試行錯誤していかなくてはなるまい。

4. 総括

最後に、本講義の学生による評価を総括しておく。1から6の問いに関しては、問5を除けば、五段階の4と5に評価が集中しており、テーマの明確性、担当教員の説明、資料の有効性、授業によって得られた成果の諸点について、概ね好評だったと判断してよさそうである。授業の内容・レベルに関する問5では、評価の3＝どちらとも言えない(普通)と回答した受講生が二番目に多い。問8で「説

明が分かりにくいところがあった、もう少し説明が欲しい部分があった」、「世界史をやっていない人には少し分からないところがあった」とのコメントがあることから、内容が難しいと感じている受講生が一定数いたということであろう。毎回の講義毎にテキストの該当箇所を指示し、予習・復習を喚起するとともに、分からないところは質問に来るよう呼び掛けているが、なかなか効果が現れず、悩ましいところである。

問7からは、ビデオや配布資料が理解の助けとなったとの回答が多く、その効果を確認することができた。また、政治的出来事よりも社会経済に焦点化することで、より幅広い社会層の生活様式やその変化にアプローチする点も、新鮮で興味深く感じているようである。限られた時間のなかで、参考文献や世界史教科書の記述をできる限り紹介していることも評価されていた。なかには文献を実際に購入したというコメントもあって、こちらの働きかけが自発的な学習に繋がったことを嬉しく思う。

授業の改善点を尋ねた問8についてはそれほど指摘がなかったが、板書の速さ・多さに指摘が集まっている。これは報告者の授業スタイルとも関わるので、修正が難しい。講義形式の授業では、受講生に対して予め、大学の授業では板書を全て書き写す必要はないこと、要点を掴み、自分自身のノートを作ること大切な訓練であることをアナウンスしているのだが、なかなか実行できないようである。また、教科書をあまり使っていないとの指摘があるが、テキストはまずは予習のために用いること、そして実際の授業はテキストの内容をアップデートしつつ進めているため、復習を兼ねてテキストとすりあわせておくこと、こうした指示をイントロダクションにおいて与えているのに、理解されていないようである。板書やテキストの位置づけ・役割については、今後は口頭で説明するだけでなく、文字化して配布するなどの工夫が必要となろう。